

平成 28 年度  
文部科学省委託調査

# 子供の読書活動の推進等に関する調査研究

## 報告書概要版

平成 29 年 3 月

株式会社浜銀総合研究所

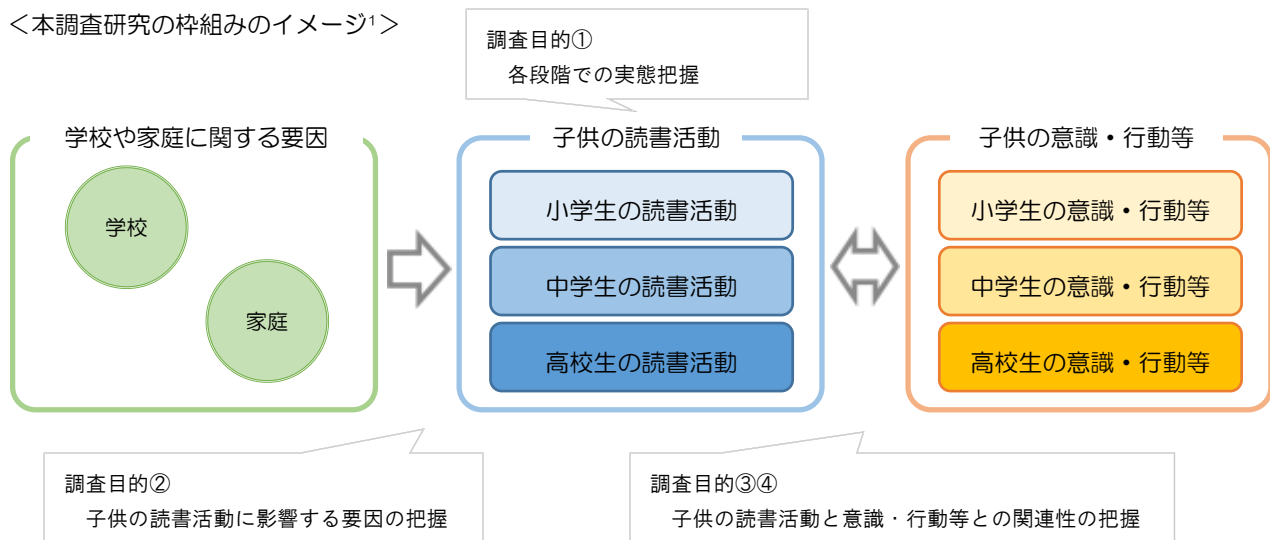
# 1. 調査研究の目的

「第三次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（平成 25 年 5 月閣議決定）において、子供の読書活動は、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであり、社会全体で積極的にそのための環境の整備を推進していくことは極めて重要であると規定されている。

このことをふまえ、本調査研究は、主に以下の 4 点に関してきめ細かい調査・分析を実施し、今後の子供の読書活動の推進に資することを目的として実施した。

- ①小学生・中学生・高校生の各段階における子供の読書活動の実態を把握する（本概要版 p.2～p.5）
- ②子供の読書活動の状況と学校での体制・取組の状況や家庭環境等との関連性について分析し、子供の読書活動を促進する方策・要因等について検討する（本概要版 p.6～p.9）
- ③読書活動が子供にどのような影響等を及ぼすと考えられるのかについて視点等を把握・整理する
- ④子供の読書活動の状況と子供の意識や行動との関連性について実際に分析し、読書活動が及ぼす影響等について検討する（本概要版 p.10～p.13）

<本調査研究の枠組みのイメージ>



# 2. 調査・分析データの概要

本調査研究では、主に以下の A～C の 3 種類の調査を実施。児童・生徒向け質問紙調査では、全国の 299 の学校、計 15,861 人の児童・生徒から回答を得た。（2017 年 1 月～2 月に実施）

A：読書活動の影響等に関する先行研究についての文献調査

B：児童・生徒向け質問紙調査

※公立の学校に在籍する、小学 4・5 年生、中学 1・2 年生、高校 1・2 年生（普通科の生徒）を対象に実施

C：管理職向け質問紙調査

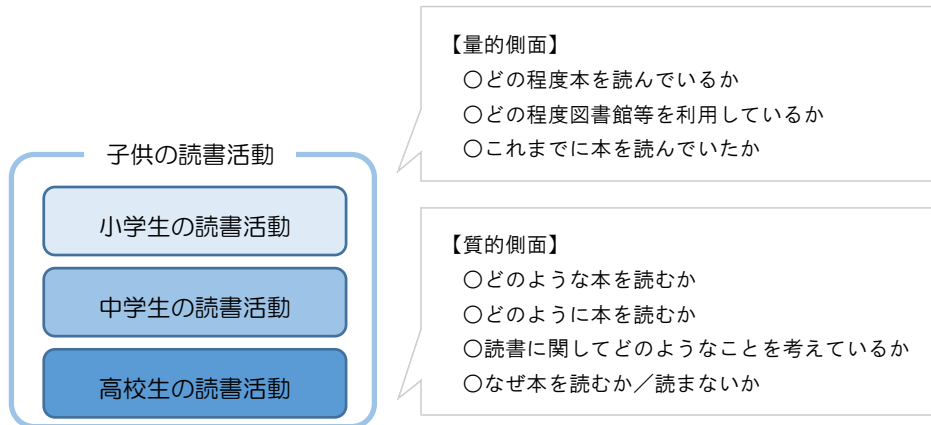
※学校での体制・取組状況等を把握するため児童・生徒向け質問紙調査とあわせて実施

調査対象	有効回答件数	内訳等
小学生	5,300	119 校の児童 4 年生 2,633 件、5 年生 2,667 件
中学生	5,749	111 校の生徒 1 年生 2,773 件、2 年生 2,916 件（学年無回答 60 件）
高校生	4,812	69 校の生徒 1 年生 2,364 件、2 年生 2,382 件（学年無回答 66 件）

<sup>1</sup> 子供の読書活動が子供の意識・行動等に及ぼす影響という点に関して、本調査研究で実施した質問紙調査での分析からは厳密に因果の関係であるとは言い難いことから、ここでは、双方向での矢印でその関係性を表現している。

### 3. 子供の読書活動の実態（調査目的①）

小学生・中学生・高校生はそれぞれの程度、どのように読書をしているのだろうか？



#### <子供の読書活動の実態把握のための視点>

量的側面	<input type="checkbox"/> 1日あたりの読書時間 <input type="checkbox"/> 1か月あたりの読書冊数 <input type="checkbox"/> 図書館等の利用頻度 <input type="checkbox"/> これまでの読書習慣等
質的側面	<input type="checkbox"/> どのような本を読むか（分野、ジャンル等） <input type="checkbox"/> どのように本を読むか （読む本の選び方・決め方等、読書技術・読み方、家族や友達との関係、学校の取組の中での読書等） <input type="checkbox"/> 読書に関する意識・考え方（肯定的な意識、苦手意識、学校図書館や学校での取組等に対する認識） <input type="checkbox"/> なぜ本を読むか／読まないか（目的意識、きっかけ、読まない理由）

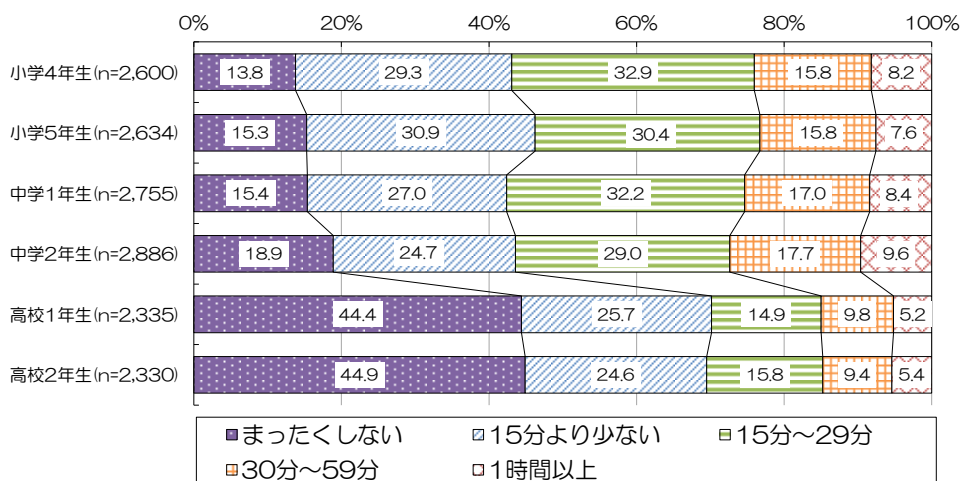
#### <分析の結果わかってきたことの一例>

- 読書時間、読書冊数ともに、学校段階・学年が上がるにつれて読まなくなる。（高校生では、全体の約4割が、1日に読書をまったくせず、また、1か月に読んだ本が0冊という状況）
- 小説等の物語の本や、趣味に関する本がよく読まれている。
- 本の内容を楽しむため、気分転換や暇つぶしのために本を読む児童・生徒が多い。
- 自然科学・社会科学なども含み、幅広い分野・ジャンルの本を読むほうが読書冊数も多い。
- 本を読まない理由として、「ふだんから本を読まないから」の回答は小学生・中学生・高校生いずれも3割を超え、小学生では「どの本がおもしろいかわからない」「文字を読むのが苦手」等、中学生では「面倒」「必要を感じない」等の回答割合が相対的に高い。高校生では「時間がなかったから」との回答割合が高い。

## 学校のある日（平日）にどれくらい本を読んでいるのだろうか？

- ★ 小学生・中学生では、平日に読書をまったくしない児童・生徒が1～2割。約5～6割は1日に30分未満の読書をしている。
- ★ 高校生では、平日に読書をまったくしない生徒の割合が4割以上。

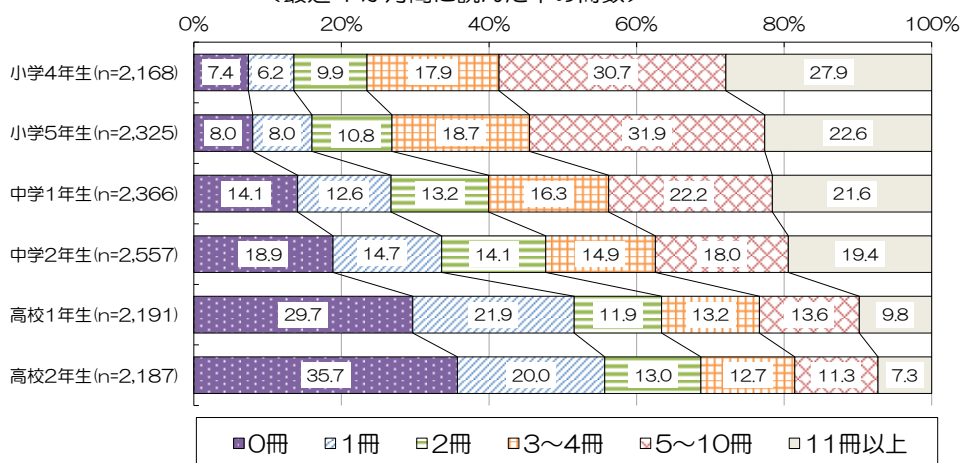
<1日あたりの読書時間（ふだん学校のある日）>



## 不読率はどれくらいだろうか？<sup>2</sup>

- ★ 小学生では1か月に5冊以上読む児童が半数を超え、不読率は1割未満。
- ★ 中学生の不読率は約1～2割、高校生（普通科高校の生徒）では約3～4割の水準。

<最近1か月に読んだ本の冊数>

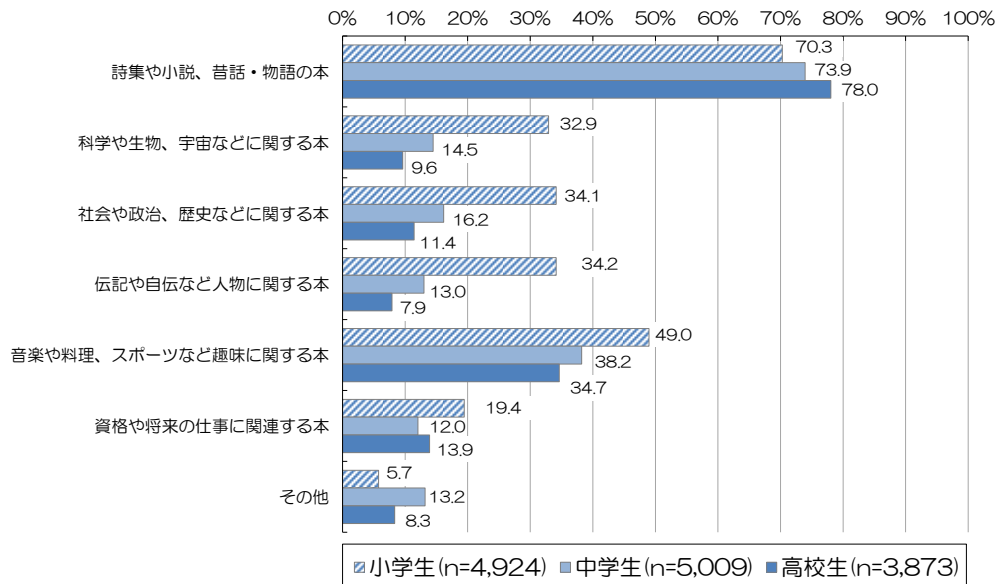


<sup>2</sup> 文部科学省「第三次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」では、全国学校図書館協議会の学校読書調査を参照し、「1か月に1冊も本を読まなかった『不読者』の割合」を「不読率」と呼んでいる。本報告書においては、児童・生徒を対象にして実施した調査で、「1か月に読んだ本の冊数が『0冊』と回答した生徒の割合」を「不読率」とした。なお、調査の実施にあたり、「本」とは、「お話などのよみもの」や、「何かを調べるための図鑑や事典など」を指すこととし、紙の本以外に、パソコンやタブレット端末、スマートフォン等で読める本（電子書籍）を含むものとした。また、マンガや雑誌、新聞、教科書や参考書は含まないこととした。なお、「マンガ」に関して、いわゆる「学習マンガ」については、「ほぼすべてがマンガで構成されているもの」は本調査における読書の対象外として考えていただくよう、調査実施の際に案内をした。

## どのような分野・ジャンルの本を読むのだろうか？

- ★ 小説等の物語の本や、趣味に関する本がよく読まれている。
- ★ 自然科学や社会科学に関する本を読む割合は、小学生に比べ中学生・高校生では低い。

＜読む本の分野・ジャンル＞

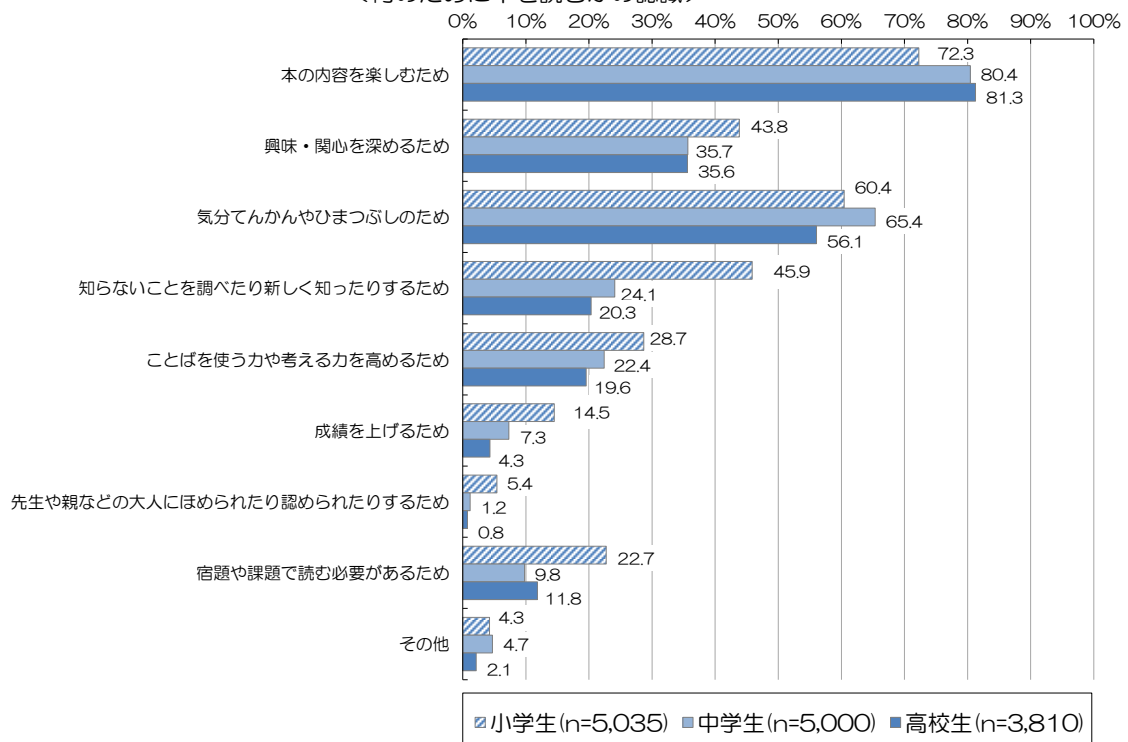


※「どれもあまり読まない」との回答は除いて集計。

## 何のために本を読むのだろうか？

- ★ 本の内容を楽しむためや、気分転換や暇つぶしのために読む児童・生徒が多い。
- ★ 新しい情報や知識を得るためといった回答は、小学生で相対的に割合が高い。

＜何のために本を読むかの認識＞

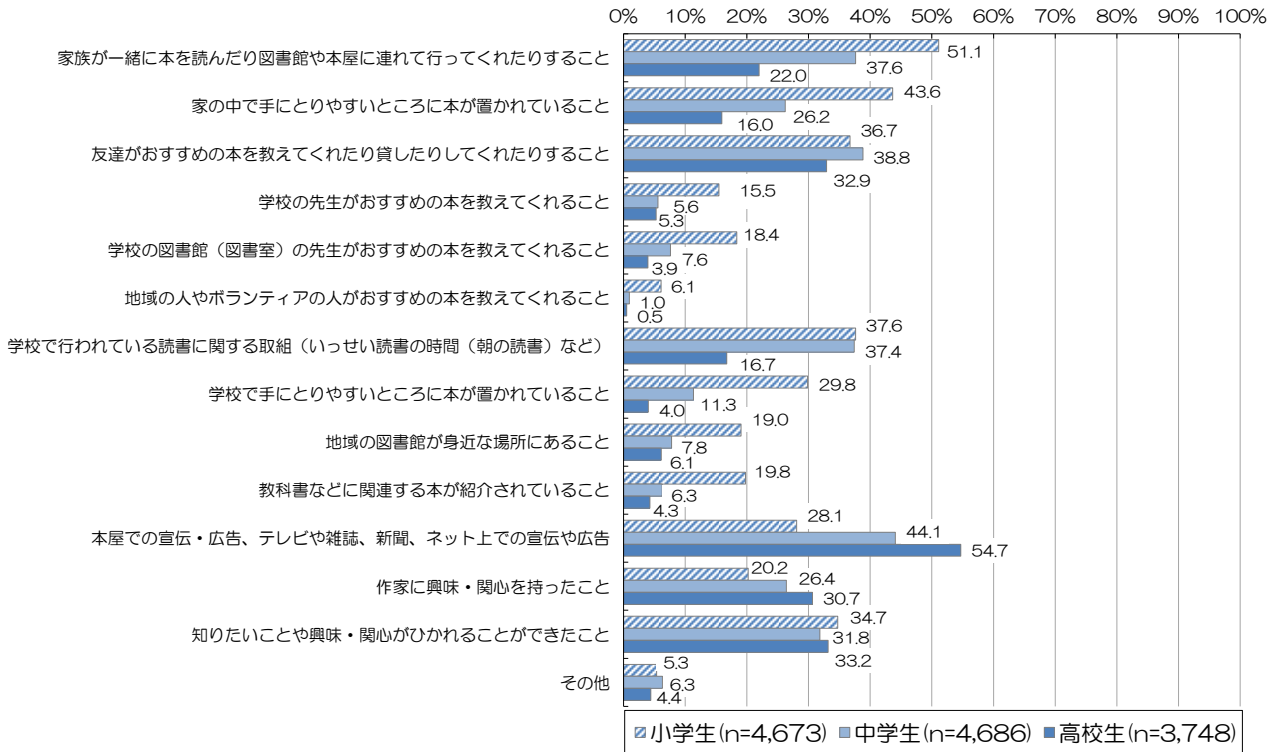


※「本はあまり読まない」との回答は除いて集計。

## どのようなことが本を読むきっかけとなっているのだろうか？

- ★ 小学生では家族や学校から、高校生ではメディアの宣伝・広告等からの影響が大きい。
- ★ 友達とのやりとりがきっかけという回答は、小学生・中学生・高校生ともに3割以上。

＜本を読むきっかけとなっていると思うこと＞

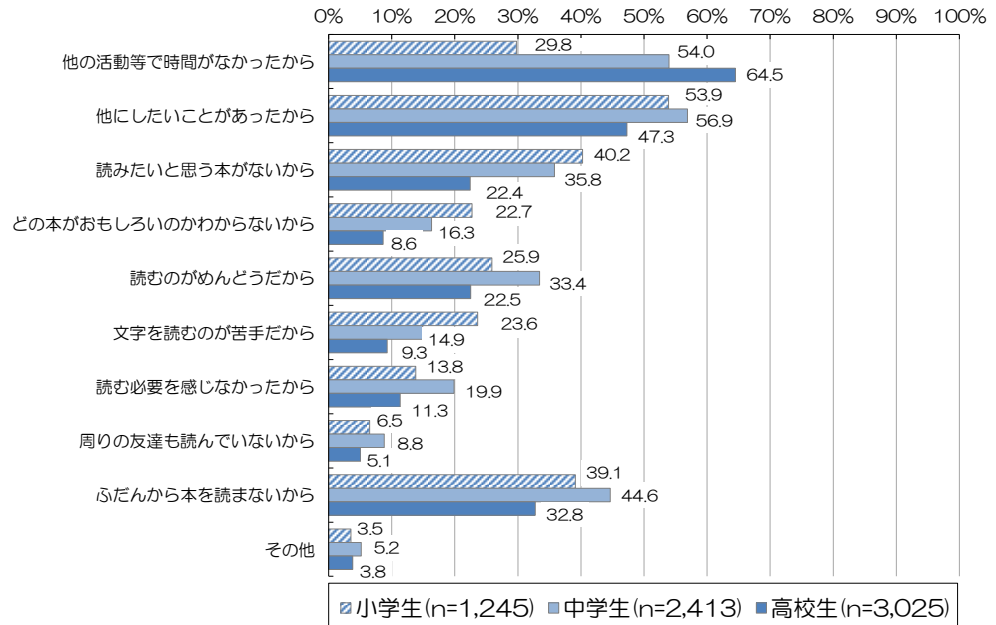


※「特にない」との回答は除いて集計。

## 本をあまり読まない児童・生徒は、なぜ読まないのだろうか？

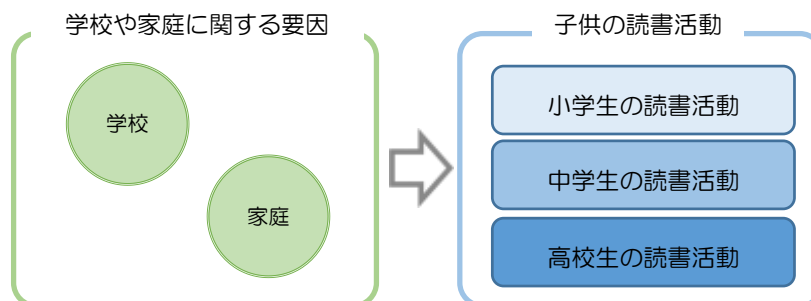
- ★ 「ふだんから本を読まないから」の回答は小学生・中学生・高校生いずれも3割を超え、小学生では「文字を読むのが苦手」等、中学生では「面倒」等の割合が相対的に高い。
- ★ 高校生では「時間がなかったから」の回答割合が高い。

＜現在本をあまり読まない理由＞



#### 4. 子供の読書活動と学校での体制・取組等との関連性（調査目的②）

子供の読書活動には、学校での体制・取組の状況や家庭環境等、どのようなことが関連しているのだろうか？



<学校や家庭に関する要因との関連性把握のための視点>

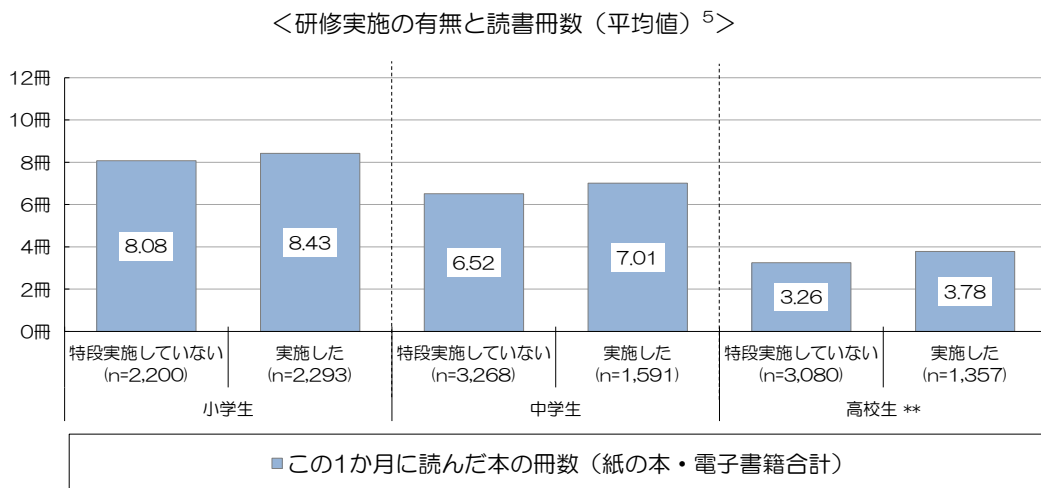
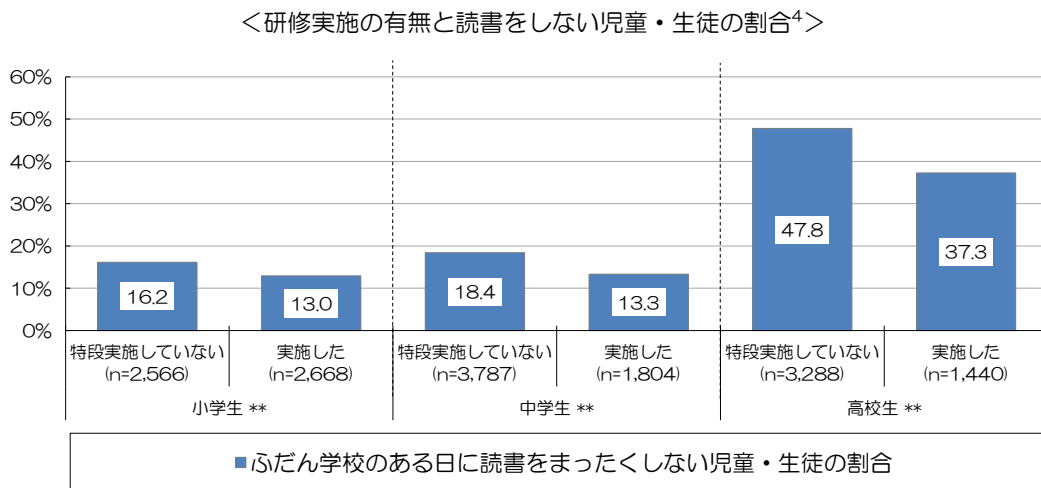
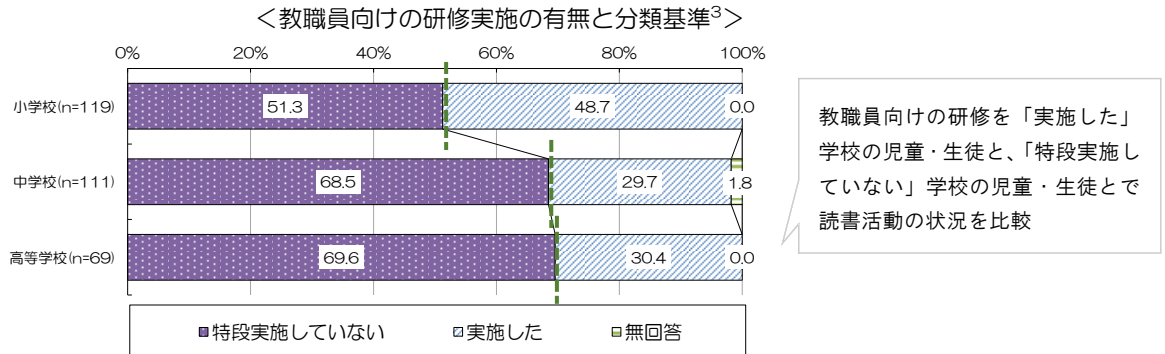
学校での体制・取組、家庭環境等		子供の読書活動
学校での体制・取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学校での読書活動推進体制                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・読書に関する計画策定</li> <li>・教職員向け研修実施</li> <li>・学校司書の配置</li> <li>・学校図書館の充実</li> </ul> </li> <li>○学校での取組状況</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ふだん学校のある日に読書をするか</li> </ul>
家庭環境等	<ul style="list-style-type: none"> <li>○家庭の蔵書数</li> <li>○本を読むことについての家族との関わり</li> <li>○読書以外の時間の使い方</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1か月の読書冊数</li> </ul>

<分析の結果わかってきたことの一例>

- 児童・生徒が本をよく読んでいる学校の特徴は、「学校として読書に関する計画を立てている」、「教職員に対する研修を実施している」、「学校司書が配置されている」、「学校図書館の活動等を支援する組織がある」、「児童・生徒から認識される充実度合いが高い学校図書館を整備している」、「読書週間でのイベントや一斉読書の時間の設定などの読書活動により力を入れている」という点である。
- 家庭での蔵書数が多く、また、家族に本を買ってもらったり紹介してもらったりする児童・生徒のほうが本を読んでいる。
- 小学生ではテレビ等を見る時間やゲームで遊ぶ時間が長いほど、中学生・高校生ではメール等をする時間が長いほど読書時間が短い。高校生では、部活動等の時間や、塾等に行く時間が長い生徒でも読書時間が短い。
- マンガ・雑誌を読む時間や勉強・宿題をする時間が長い児童・生徒では読書時間も長く、これらの活動は読書時間を阻害しているわけではない。

## 教職員研修を実施する学校では、より本が読まれているのだろうか？

- ★ 研修が実施されている学校では、平日に本を読まない児童・生徒の割合が低い。
- ★ 研修が実施されている高等学校の生徒は、読書冊数が多い。



<sup>3)</sup> 複数選択が可能な設問で、平成28年度中に実施予定の場合も含み、「児童・生徒の読書活動推進や学校図書館の利活用に関する教職員向けの研修」に関し、「校内で校内の教職員のみで研修を実施した」「校内で学校外から講師等を招聘して研修を実施した」「校外の研修に教職員を派遣した」「その他の方法で研修を実施した」のいずれかに回答があった場合を「実施した」として分類した。

<sup>4)</sup> 統計的に有意な関係の場合には、図表中の「小学生」「中学生」「高校生」の表記の右隣に記号を付した。（以下同様）  
（\*\*：1%水準で有意、\*：5%水準で有意、記号がっていない場合：有意差無し）

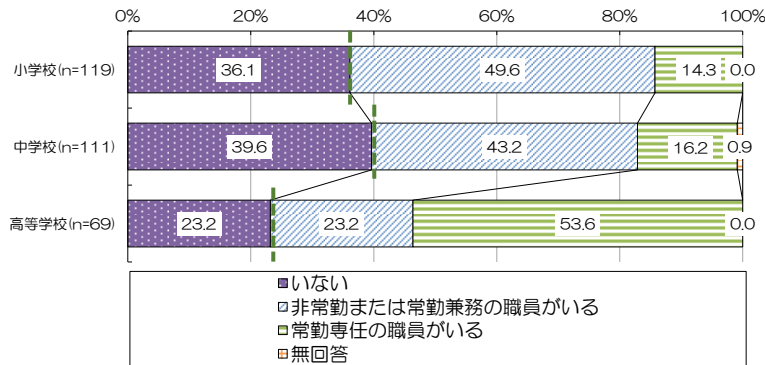
<sup>5)</sup> 読書冊数について、冊数が非常に多い回答が平均値に与える影響を考慮し、30冊以上の回答は「30」として集計した。（以下同様）



## 学校司書がいる学校では、より本が読まれているのだろうか？

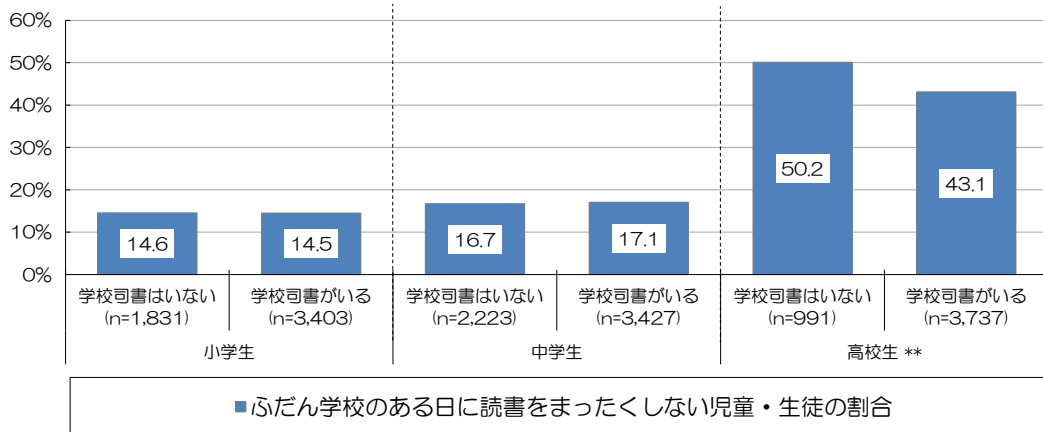
- ★ 学校司書がいる小学校・中学校の児童・生徒は、読書冊数が多い。
- ★ 学校司書がいる高等学校では、平日に本を読まない生徒の割合が低い。

＜学校司書の配置状況と分類基準＞

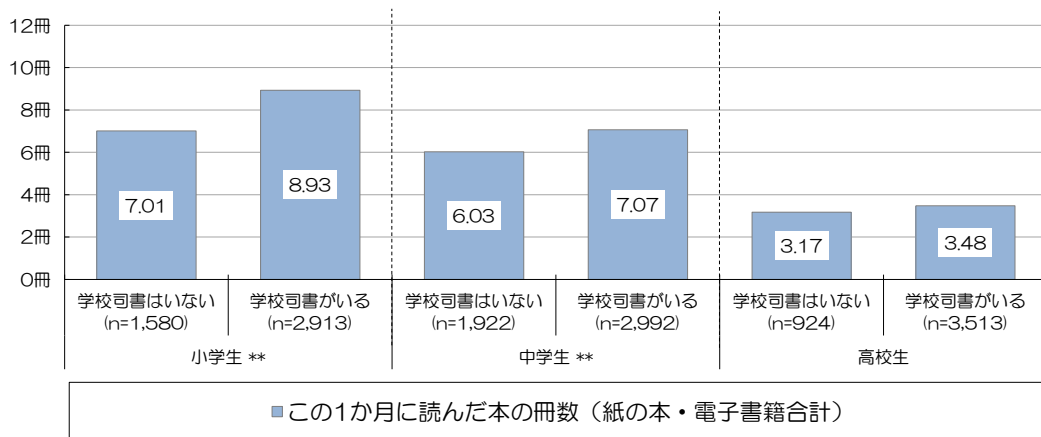


学校司書が「いる（非常勤や常勤兼務の場合を含む）」学校の児童・生徒と、「いない」学校の児童・生徒とで読書活動の状況を比較

＜学校司書の配置の有無と読書をしない児童・生徒の割合＞



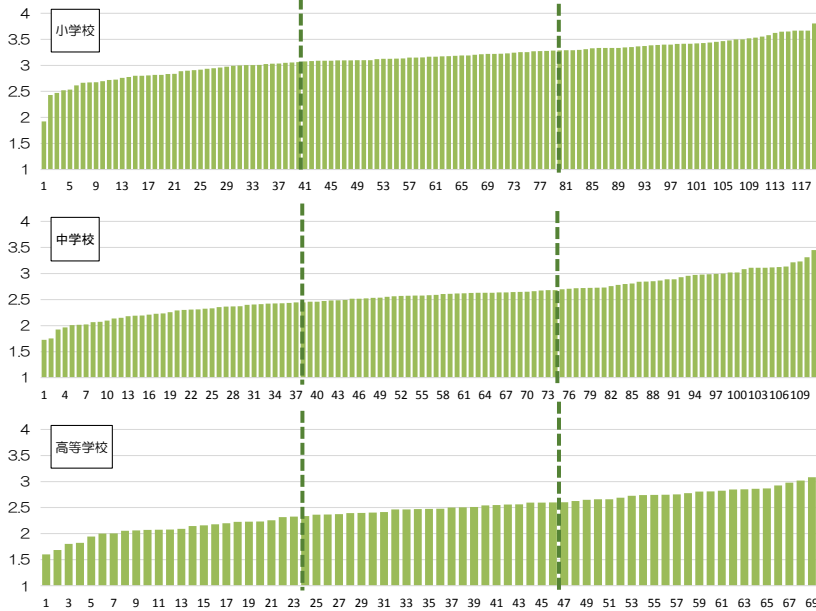
＜学校司書の配置の有無と読書冊数（平均値）＞



# 学校図書館が充実している学校では、より本が読まれているのだろうか？

★ 学校図書館の充実度が高い学校の児童・生徒ほど、平日に本を読まない割合が低く、また、読書冊数が多い。

＜学校図書館の充実度合いに関する指標と分類基準＞

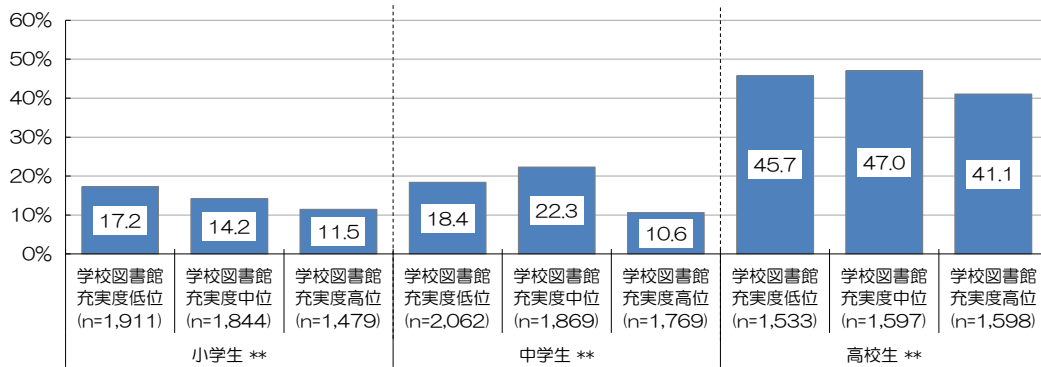


①「学校の図書館（図書室）には読みたいと思う本がある」、②「学校の図書館（図書室）では読みたい本が見つかるように工夫されている」、③「学校の図書館（図書室）は居心地がいい」の3項目に対する児童・生徒の回答から、学校図書館の充実度合いに関する指標を作成し、その指標の水準別に小学校・中学校・高等学校のそれぞれを3群（「低位」「中位」「高位」）に分類。分類別に児童・生徒の読書活動の状況を比較

（小学校は低位：40校、中位：40校、高位：39校、中学校は各37校、高等学校は各23校）

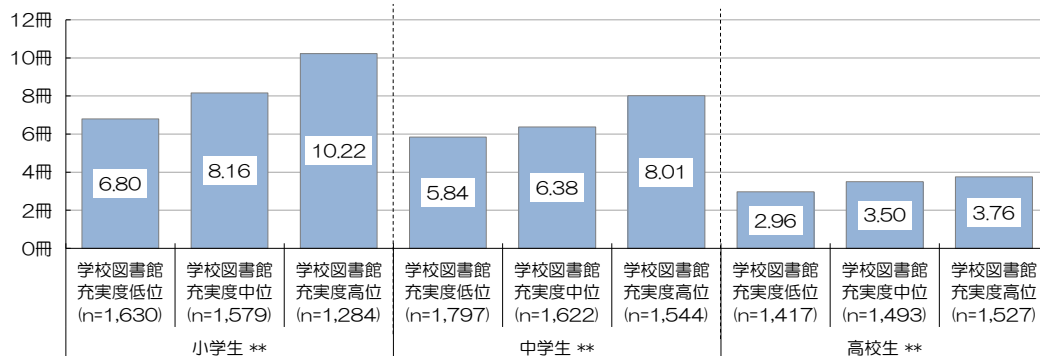
※縦軸が充実度合いに関する指標の得点、横軸は各学校をその得点順に並べたもの（左側から「低位」「中位」「高位」に分類）。

＜学校図書館の充実度合いと読書をしない児童・生徒の割合＞



■ 1週間学校のある日に読書をまったくしない児童・生徒の割合

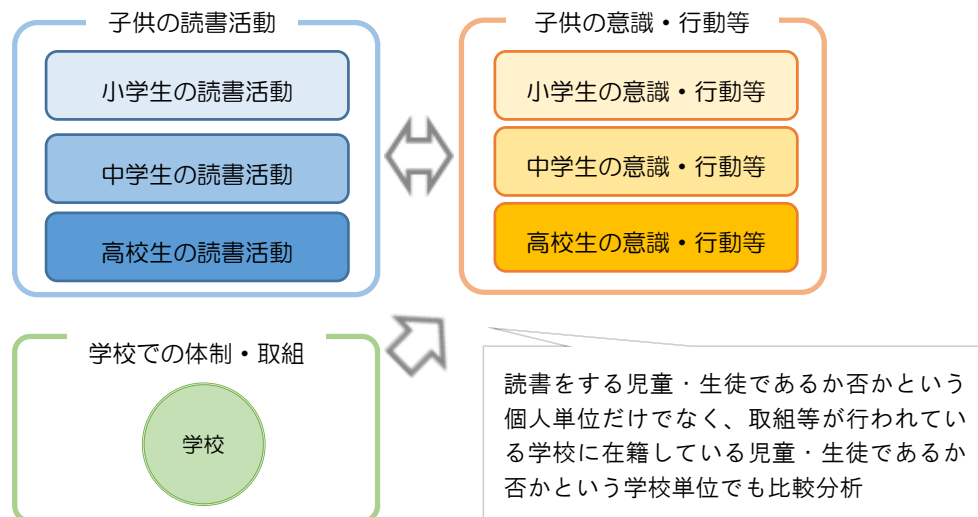
＜学校図書館の充実度合いと読書冊数（平均値）＞



■ この1か月に読んだ本の冊数（紙の本・電子書籍合計）

## 5. 子供の読書活動と意識・行動等との関連性（調査目的③④）

読書活動が活発な児童・生徒は、論理的思考等の様々な意識や行動に関する指標の得点も高いのだろうか？



<意識・行動等との関連性把握のための視点>

子供の読書活動		子供の意識・行動等
回答者別	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1日あたりの読書時間</li> <li>○1か月あたりの読書冊数</li> <li>○これまでの読書習慣等</li> <li>○どのような本を読むか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○論理的思考</li> <li>○意欲・関心</li> <li>○意思伝達</li> <li>○状況把握・動揺対処</li> <li>○視点獲得</li> <li>○他者理解</li> <li>○人間関係</li> <li>○現在の充実感</li> <li>○将来展望</li> </ul>
学校別	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学校での体制・取組の状況</li> </ul>	

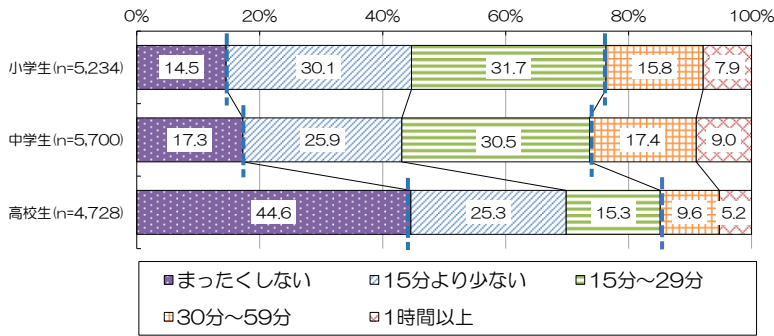
<分析の結果わかってきたことの一例>

- 読書活動の度合いと子供の意識・行動等に関する得点の間には、正の関連性がある。
- 読書活動と、意識・行動等に関する得点との間の正の関連性は、個人属性や家庭環境の違い、また、ふだんテレビを見る時間や勉強をする時間等の違いを考慮しても見られる。中学生・高校生では特に「論理的思考」について、読書をする生徒の得点が高い。
- 過去の段階での読書習慣の有無も、意識・行動等に関する得点に関係している。小学生の段階で本をよく読んでいた中学生、中学生の段階で本をよく読んでいた高校生は、「論理的思考」「意欲・関心」「人間関係」等の面で得点が高い。
- 小学生・中学生では、個人単位での比較だけでなく、読書に関する取組等が行われている学校に在籍している児童・生徒であるかという、学校単位での比較でも違いがある。

# よく読書をするほうが、論理的思考等の得点は高いのだろうか？

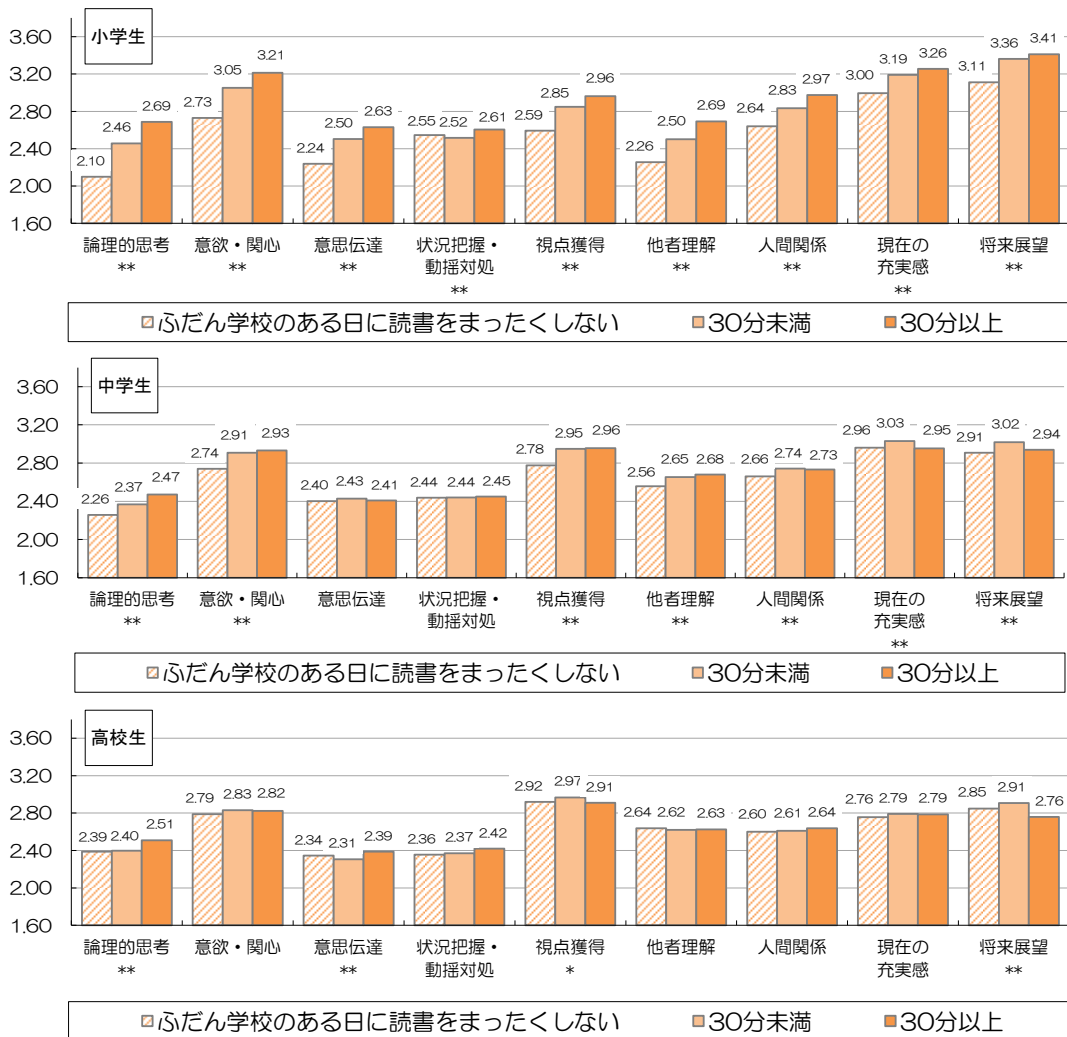
- ★ 読書時間と意識・行動等に関する得点との間には、特に小学生で広く正の関連性がある。
- ★ 高校生でも、「論理的思考」などで、読書をする生徒のほうが得点が高い。

＜平日 1 日あたりの読書時間の回答状況と分類基準＞



ふだん学校のある日の読書時間の多寡によって児童・生徒を分類し、意識・行動等に関する指標の水準を比較

＜平日の読書時間と意識・行動等との関連性<sup>6</sup>＞

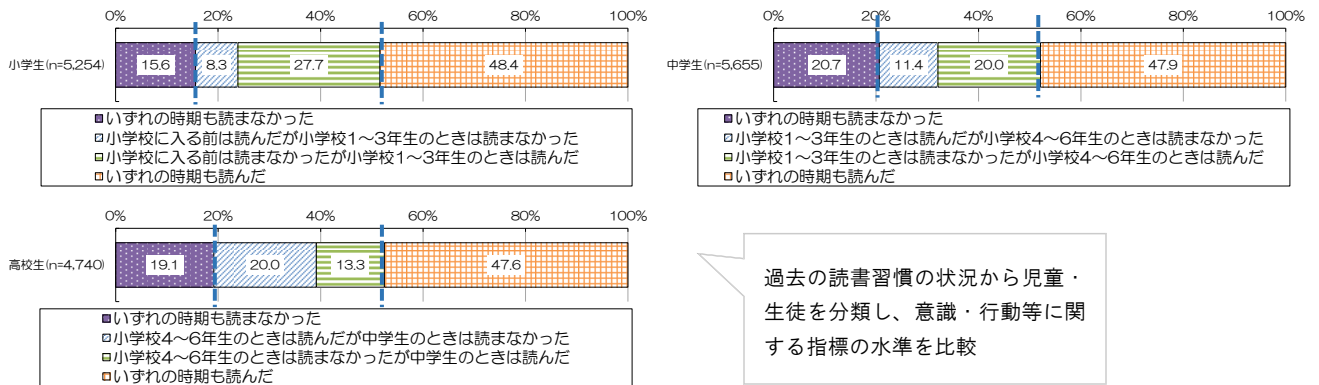


<sup>6</sup> 意識・行動等に関する各指標の平均値を比較し、統計的に有意差が見られた点については指標の名称下部に印を付した。(以下同様) (\*\*: 1%水準で有意, \*: 5%水準で有意, 記号がない場合: 有意差無し)

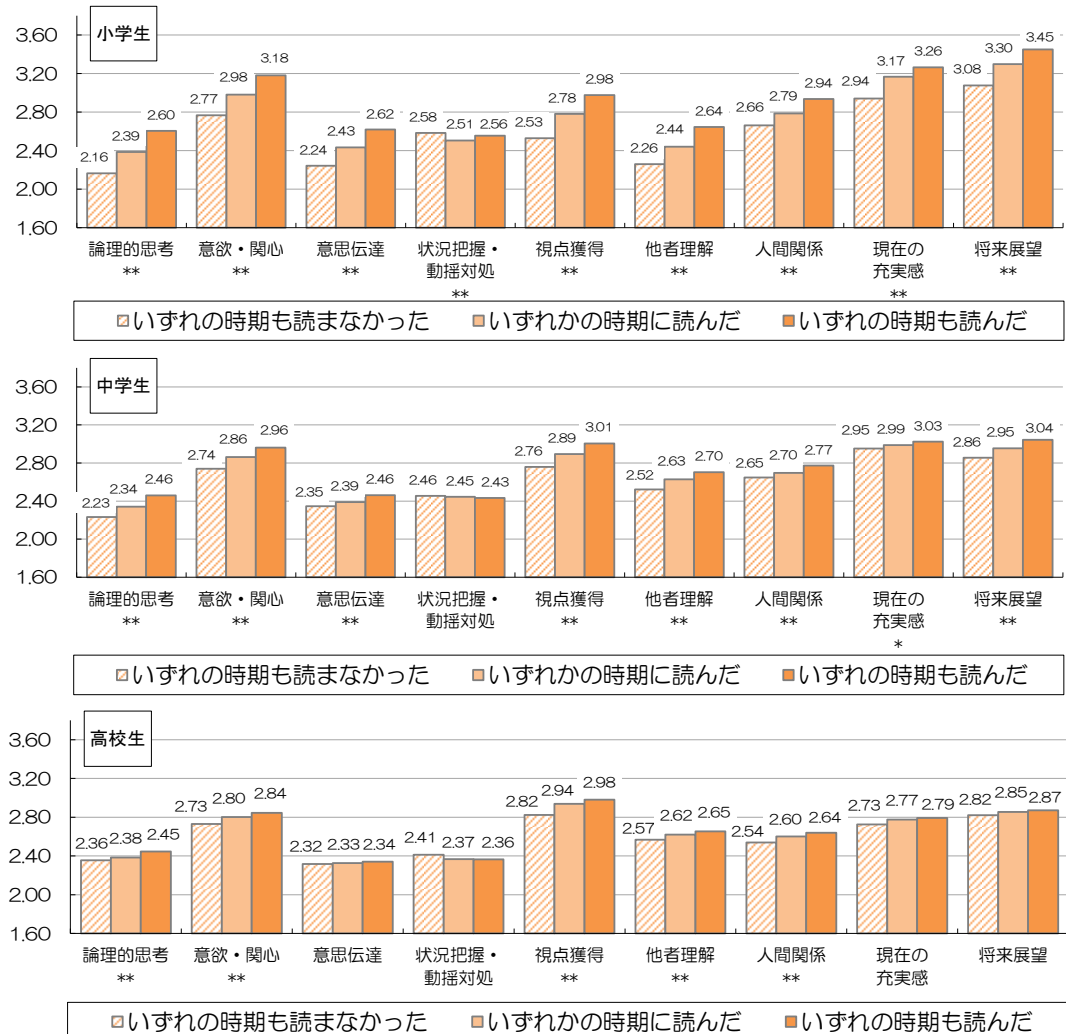
# 継続的な読書習慣があるほうが、論理的思考等の得点は高いのだろうか？

- ★ 小学生・中学生では、「状況把握・動揺対処」以外の点について、これまで継続的に読書をしてきた児童・生徒の得点が高い。
- ★ 高校生でも、「論理的思考」「意欲・感心」「視点獲得」「他者理解」「人間関係」について、継続的に読書をしてきた生徒の得点が高い。

＜過去の時期における読書習慣の状況と分類基準＞



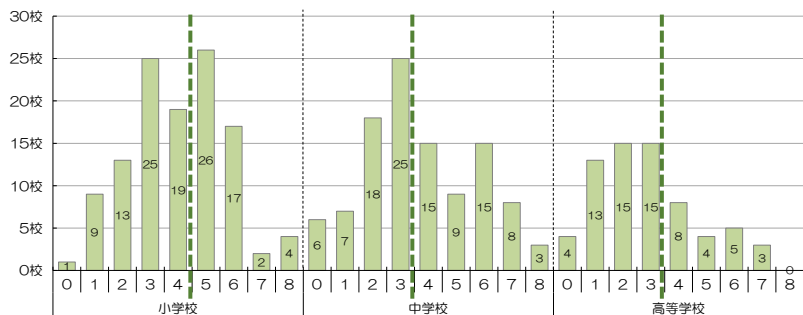
＜過去の読書習慣と意識・行動等との関連性＞



# 論理的思考等の得点の差は、学校単位の比較でも見られるのだろうか？<sup>7</sup>

★ 小学生・中学生では、読書活動推進に関する体制が整備され、取組を実施していると考えられる学校に在籍している児童・生徒のほうが、意識・行動等の得点が高い傾向がある。<sup>8</sup>

＜取組状況に関する該当項目数の分布と分類基準＞

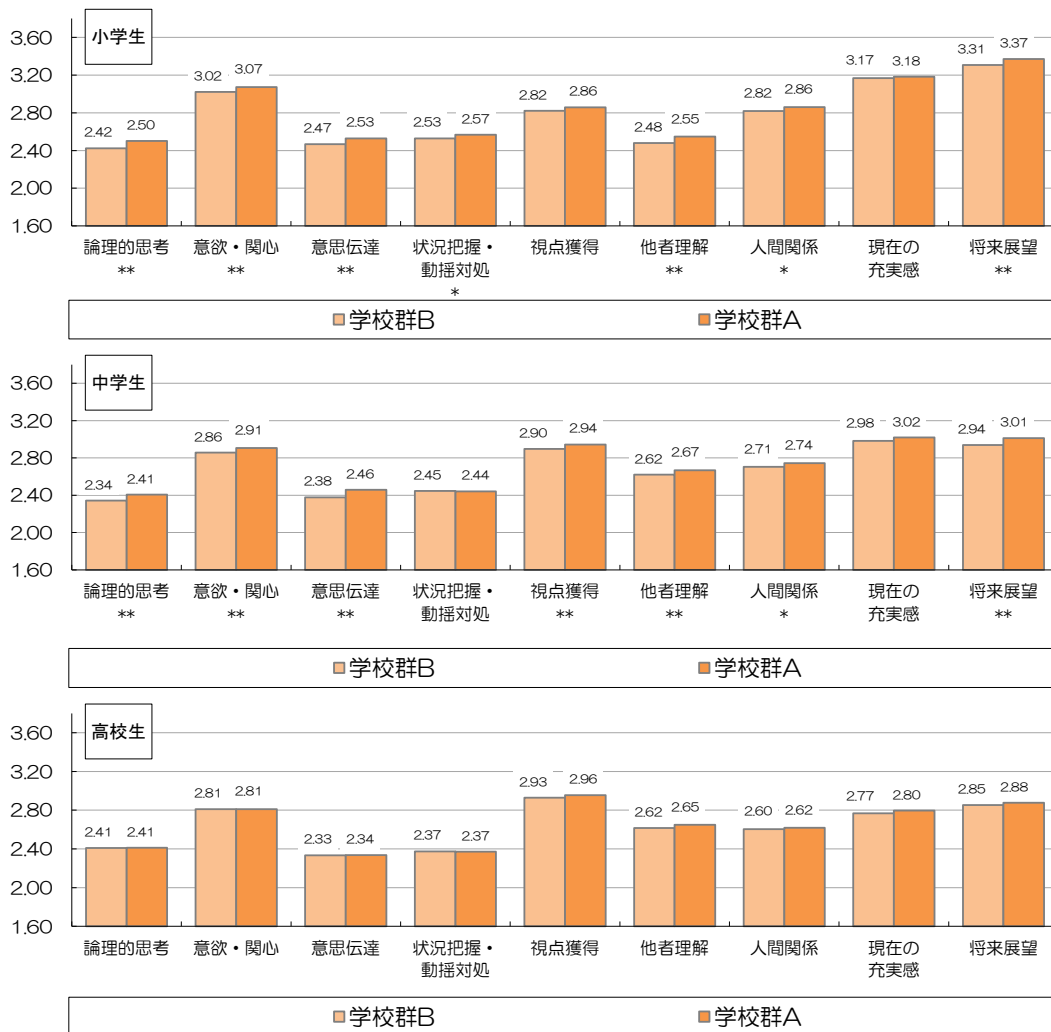


児童・生徒の読書活動推進のための取組をより多く行っていると考えられる学校群（群A）と、対照群（群B）とで、在籍している児童・生徒の意識・活動等に関する指標を比較

（小学校は5項目以上の場合をA群、中学校・高等学校は4項目以上の場合をA群とした）

※横軸が該当項目数を、縦軸が該当項目数別の学校数を意味する。

＜取組状況による学校分類と意識・行動等との関連性＞



<sup>7</sup> 学校の分類は、「計画策定の有無」「教職員に対する研修実施の有無」「学校司書の配置の有無」「学校図書館の活動を支援する組織の有無」「児童・生徒が認識する学校図書館の充実度」「読書週間でのイベント等の実施の有無」「一斉読書の時間の設定の頻度」「児童・生徒が認識する活動に力を入れている度合い」の8点から、観点・基準別に該当する場合を1、該当しない場合を0として、足し合わせて指標化した（最小値0、最大値8）。

<sup>8</sup> 高校生では有意な差が見られなかったが、この点については、在籍している生徒のそれまでの読書習慣の違いや、部活動やその他学習に関する活動等との優先度合いの違い等も影響しているのではないかと推察される。

## 6. まとめ・考察（読書活動が子供の意識・行動等に及ぼす影響等について）

- 本調査研究では、児童・生徒の意識・行動等に関して、質問紙調査で「論理的思考」「意欲・関心」「意思伝達」「状況把握・動揺対処」「視点獲得」「他者理解」「人間関係」「現在の充実感」「将来展望」の9つの観点に関する項目及び指標を設定し、読書活動との関連性について分析した。その結果、読書をする事と、意識・行動等に関する得点との間には、多くの点で正の関連性があることが明らかになった。
- 特に小学生に関しては、読書活動が学力的側面や、他者との関係性に関わる意識等の向上に関して、広く影響を及ぼしているものと考えられる。また、「論理的思考」という、その後の高等教育段階・成人段階でも非常に重要になると考えられる能力に関する指標で、中学生・高校生段階での読書活動と関連性があることが示された。さらに、本調査研究では、小学生・中学生・高校生ともに、読む本の分野・ジャンルの多様性や、宿題等とは関係なく自分から読むということが、児童・生徒の意識や行動等の向上とより強く結びついている可能性があることも示唆された。
- 中学生・高校生の意識・行動等は、それぞれの学校段階でどの程度読書をしているかだけでなく、小学生の時期の読書習慣など、過去の段階での読書習慣とも関連性を持つ。児童・生徒の意識・行動等に対する読書活動の影響は、短期間で発現するものだけでなく、長期間の時系列の中で次第に差が生じるという形で見られるものもあることが示唆される。
- また、読書活動と意識・行動等との関連性については、読書をよくする児童・生徒であるか否かという個人単位の分析だけでなく、学校単位の分析でも見られた。特に小学生・中学生の段階では、学校において読書活動推進に関する体制を整備し、取組等を実施することが、児童・生徒の読書活動を実際に促進し、さらには、意識・行動等の向上に寄与する可能性がある。
- なお、学校単位での分析では差異が見られなかったが、「論理的思考」などとの関連性をふまえると、高校生に対し、学校としてどのような取組等の実施がありうるかという点を検討していくことは引き続き重要なテーマである。本調査研究では、高校生について他の活動等で時間がないから本を読まない（読めない）生徒の割合が高いことや、本を読むきっかけについて小学生・中学生の回答傾向とは異なることなども把握されたが、これらの特性の違いをふまえた検討が必要である<sup>9</sup>。

本調査研究は、以下の有識者からなる調査検討委員会を設置し実施しました。（50音順、所属・役職等は当時のもの）また、本調査研究の実施にあたり多くの学校、児童・生徒の皆様にご協力いただきましたことをお礼申し上げます。

氏名	所属
（座長）秋田 喜代美	東京大学大学院教育学研究科 教授
腰越 滋	東京学芸大学総合教育学系 准教授
鈴木 佳苗	筑波大学図書館情報メディア系 准教授
常深 浩平	いわき短期大学幼児教育科 専任講師
濱田 秀行	群馬大学教育学部 准教授
深谷 優子	東北大学大学院教育学研究科 准教授
堀川 照代	青山学院女子短期大学現代教養学科 教授

<sup>9</sup> これらの点について、過年度の調査研究（平成26年度文部科学省委託調査「高校生の読書に関する意識等調査」、平成27年度文部科学省委託調査「地域における読書活動推進のための体制整備に関する調査研究」）でも検討を行っているため、そちらも参照されたい。